

もうひとつの態

——人間の自然——

木下 聖三

目次

1. もうひとつの声
2. 能動的でも受動的でもない態
3. 中動的な主体
4. 二つの態の両立可能性
5. 「能動／受動」の言語と「能動／中動」の言語
6. 廻行的に見出される意志と自然

1. もうひとつの声

キャロル・ギリガンが『もうひとつの声』（原著『*In a Different Voice*』1982年刊 [1986]）を世に問うて30余年。当初よりフェミニズムの立場からの知識批判として評価される一方で（山岸明子「ギリガンによるコールバーグ批判」[1987：194-200；1995：225-237]、江原由美子『フェミニズムのパラドックス』[2000：127-134] 参照）、それが「女性の声」と同定される限りにおいて、ジェンダー・バイアスを強化する言説であるという批判を免れられず、次いで「具体的な他者の声」と再定式化が施されるも、これまたジェンダー・ブラインドネスに寄与するばかりであるという批判に晒された（こ

のような褒貶はギリガンの議論に宛てられた「女らしい倫理学」feminine ethics という呼称に象徴される。掛川典子「フェミニスト・エシクスの問題」[1993：32-33]、森村修『ケアの倫理』[2000：114]、上野千鶴子『ケアの社会学』[2011：50] 参照。結局、「もうひとつの声」とは何なのか、未だに評価が定まっていない観すらある。

この点について、当書の趣旨に賛同する川本隆史にも、反対する上野千鶴子にも言及されているながら、その後あまり掘り下げられていない読み方がある。それは「voice」を「態」と訳する読み方である。

ギリガンが使う‘voices’には、能動・受動の「態」の他、本書の序論で著者が言い換えているように「語り方」(ways of speaking) ないし「記述の様式」(modes of describing) という意味があるのはもちろんだが、A. O. ハーシュマンのユニークな組織論『退出・告発・忠誠』における‘voice’ (告発=内部変革のために世論を喚起し、影響力を行使しようとする成員の行動) の含意も合わせもっている。

(川本『現代倫理学の冒険』[1995：245])

タイトルの「voice」には、「声」という意味と文法用語の受動態・能動態の「態」の意味をかけてある。

(上野『差異の政治学』[2002：12])

さて、「voice」が「態」であるとして、果たして「もうひとつの態」とは何なのだろうか。これを「受動態」と同定してみても、話の通りが良くはならないし、おそらくそういうわけで、この読み方は顧みられていないのだろう。

2. 能動的でも受動的でもない態

しかし、私はもう少し「もうひとつの態」という読み方にこだわってみたい。というのも、能動態でも受動態でもないような「態」に注目した議論が

散見されるからである。たとえば、細見和之によって読み込まれたヴァルター・ベンヤミンの言語論や、西村清和によって読み込まれたハンス＝ゲオルク・ガダマーの遊戯論。ここで細見や西村の名前を挙げるのも、彼らが文中の「Mediale」という語に対して、「中動相」という「態」を意識した訳語を意識的に採用しているからである。

ともあれ、本質と現象の二元論にたいして言語論において存在の一元論を対置するというベンヤミンの構えは明瞭である。しかしこの一元論は、その内部に何の力学も孕んでいないようなのっぺりとした一元論なのではない。言語においては能動性と受動性が一体となって絡み合っており（以下の引用で「中動相的なもの」と訳しているあり方）、それが言語を「純粋な媒質」としているというのがベンヤミンの理解である。そしてそれがまた、きわめて秘教的な響きをもって「言語の魔術」とも呼ばれる。

（細見『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』

[2009 : 21]）

実際、「中動相的なもの」という訳語をあててきた das Mediale には、じつは「霊媒能力」という意味もあるのだ。まるで優れた霊媒師のように、精神的本質を直接的かつ魔術的に体現しているもの、それがベンヤミンの考えている言語であると、私たちはひとまず考えることができるだろう。

（細見『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』

[2009 : 25]）

この、わたしもの、遊び手と遊び相手とのあいだにおのずから生じる、主・客わかちがたい関係、存在様態を、ガダマーは、遊びのもっとも根源的な意味としての「中動相的な意味 (der mediale Sinn)」と呼ぶ。

（西村『遊びの現象学』[1989 : 32]）

日本でも会話がキャッチボールになぞらえられるように、およそ言語活動とボールゲームとは類比的であり得て、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインがその辺りの機微を「言語ゲーム」(Sprachspiel)と表して概念化したほどであるわけだが、その只中にあるのは、言語やボールはただ受動的であるばかりの単なる道具ではないし、プレイヤーの方も純粹に能動的であるとは言えない。ベンヤミンは言語が受動的であるばかりでない点に、ガーダマーはプレイヤーが能動的であるばかりでない点に注目して、それを「中動相的」と表したのだと言えよう(中動「相」も中動「態」もどちらも middle「voice」の訳語であることに注意されたい。以下引用文でない限り、「中動態」と記述する)。

3. 中動態的な主体

「もうひとつの(声でなく)態」を見定めるために参考になるのは、人間の中動態的な様相に注目し続ける木村敏の議論である。木村は随所でそれが長井真理に負うアイデアであることを強調しつつ、坂部恵や野家啓一との継続的な対話の中で、中動態の問題にこだわりを見せている(木村坂部対談 [2006; 2009] および木村野家対談 [2011; 2013; 2015]。同時期の講演 [2014: 119-138, 139-163, 165-187] やインタビュー [2008] でも同趣旨の議論が展開されている)。

木村 私は日本語というのは意外とその中動相になじむ言葉ではないかと思っていますんですよ。「思える」とか「見える」とかいうような言葉ですね。たとえば「見える」というのは「見る」のでも「見られる」のでもなく、「そんなふうに見える」とか中動相的な感じで言いますよね。

(木村/坂部「対談・〈作り〉と〈かたり〉」[2009: 24-25])

木村 「なる」も中動相ですかね。あれを西洋の言葉で言うと、werdenとか devenir ですか。それだと「生成」という意味で読みますけれども、

ちょっと違いますもんね、日本語の「なる」と「生成」と。

(木村／坂部「対談・〈作り〉と〈かたり〉」[2009：25])

木村はこう述べて、「みずからが為す」という場合の能動的な主体の様相と「おのずから成る」という場合の、いわば中動的な主体の様相とを対置して見せる。

このような対照からは直ちに、歴史に「つぎつぎとなりゆくいきほひ」を見る（塩原俊の言を借りれば「すべて成り行きでズルズルベツタリで進んでしまう」と見る）丸山眞男の「歴史意識の古層」論 [1996]（塩原によるパラフレーズは「丸山自主ゼミナールの記録」『丸山話文集 2』[2008：202]より）や、丸山の議論に触発された相良亨の「おのずから形而上学」[1995]などが思い起こされる。丸山や相良の議論を受けて、竹内整一はこの対照を次のように表現している。

われわれはしばしば、「今度結婚することになりました」とか「就職することになりました」という言い方をするが、そうした表現には、いかに当人「みずから」の意志や努力で決断・実行したことであっても、それはある「おのずから」の働きでそう“成ったのだ”と受けとめるような受けとめ方があることを示しているだろう。

(竹内『「おのずから」と「みずから」』[2004：iii])

なるほど、私たちには確かに「みずからがそう為した」にもかかわらず、「おのずからそう成ったのだ」あるいは「そう成ってしまったのだ」という受けとめ方があるように思える。丸山はそこに日本人の前近代性を見て批判し、相良は同じところに日本人の可能性を見ようとしたのだったが、しかし、ことは日本人に限った話ではないのではないか。丸山も相良もあるいはそのように問題を限定していたわけではないのかもしれない。翻って、木村もまた、（すべての人間に共通しているはずの）この辺りの機微の捉え方に関するヨーロッパ人と日本人の違いを述べているようにも思う（つまり、丸山も

相良も木村もみな、「なべて人間には二様の側面があるに違いないのだが、いざそれを俎上に載せようとする時に、彼我の力点に違いが生じる」という話をしているように思う)。

4. 二つの態の両立可能性

木村 実はこれは私と〔ヴォルフガング・〕ブランケンブルク氏とのあいだでちょっとしたディスカッションがあったんですけど、私は昔から「おのずから」と「みずから」、自然と自己を対にして考えていますでしょう。そうしたら彼も『自明性の喪失』という本の中で、von selbstと selbst を対比させていて、その発想は非常によく似ているわけです。ドイツ語で von selbst という「ひとりで」「おのずから」という意味ですし、selbst はもちろん「みずから」という意味ですから。それで彼はそのふたつは弁証法的な関係だということを用いているわけですよ。ブランケンブルクという人は、わりあい弁証法的という言い方をするのが好きな人で、必ずしもヘーゲル的な弁証法を考えているとも思わないんだけど、なにか緊張関係にあるということなんでしょう、このふたつがね。だから彼が言おうとしているのは、西洋人はたぶんみなそう思っているんだろうと思うけど、ものごとが自然に、von selbst に進んでいるときには、自己 selbst の出番はない。逆に自己を前に出すと、なんとなくぐしゃくして、自然でなくなる。だからこの両者は弁証法的関係だということを用いるのは彼は言うんですけどもね。私は「みずから」と「おのずから」というのは、両方とも「から」というところに共通の根をもっていると思っているわけです。あるいはこれを漢字で「自己」と「自然」と書いたときには、「自」という共通の根をもっている。「自」も「から」という意味ですから。「から」とか「自」とかいった、そういう一種の根源的な自発性みたいなものを共有していて、そういう点で決して緊張関係にはない。どちらかが表に出てどちらかが裏にまわるだけで、どちらの面を見ているかというだけのことで、実は同じものではなからうか

ということを考えているわけです。

(木村／坂部「対談・生と知のアクチュアリティ」[2006：32-33])

木村 ブランケンブルクは、「みずから」selbstと「おのずから」von selbstは弁証法的な相補関係にあるんだ、というようなことを言うんです。あまりにも物事がvon selbst、おのずからにすすんでいると、selbstみずからの立つ余地がない。selbständigにならない、というようなね。

野家 その場合、selbstの方が「みずから」になるわけですね。

木村 「みずから」と「おのずから」——これはブランケンブルクが亡くなるまで、最後までほんと意見がびたっと合わなかったとこ Nonetheless、ぼくはこの二つはやっぱり等根源的のしか言いようがないと思ってるんですよね。決して弁証法的な、片方が立てば片方が立たない、というようなものではないんじゃないか、と思ってるんですけどね。

(木村／野家「対談・臨床哲学とは何か」[2015：60-61])

長々と引用してしまったが、要は「みずからが為す」という場合の能動的な主体の様相と「おのずから成る」という場合の中動的な主体の様相とを対置するまでは変わるところがなく、これらの関係如何を見定める段になると、彼我で捉え方が違ってくる、という話であろう。

ここでようやくギリガンの話に戻るのだが、というのも、ギリガンも二様の志向の関係如何について論じていたからである（ただし、ギリガンは「voice」を「態」と明言してはいないのだが、本稿ではどこまでもそのように読み換え通す）。品川哲彦が指摘しているように、ギリガンは当初「結婚」になぞらえていた両者の関係を、後に多義図形の比喩で言い換えている（品川は後者を「反転図形」と呼んでいる。どう呼ぶにせよ、ジョセフ・ジャストローのうさぎあひる図をイメージすれば良い。ギリガン「道徳の方向性と道徳的な発達」[2014] 参照）。

木村の談話に沿わせるならば、ギリガンは当初、木村と同じく両者を同時

並存可能なものと見ていたが、後にブランケンブルクと同じく両者並び立たないものと見るようになったのである。

品川は端的にこう評している。

私は結婚よりも反転図形の方が比喩として適切だと考える。ある道徳的な観点をとるということは、事態が別様にみえるということにほかならない。そのことを、この比喩はあざやかに示しているからだ。

(品川『正義と境を接するもの』[2007: 163])

これはすなわち、品川はブランケンブルクと見方を同じくするという一方で、多義図形の比喩を採るギリガンもまたそうだということである。

品川の主張をもう少し敷衍するならば、ギリガンと品川とは、多義図形の比喩によって、ウィトゲンシュタインがジャストローのうさぎあひる図に即して記述したような(「うさぎの絵」が突然「あひるの絵」に見えるといった)相反する二つの見方の変換可能性を説いたのだったが、逆に言えば、やはりウィトゲンシュタインが記述したような(「うさぎの絵」と「あひるの絵」とは「たとえそれらが合同であろうとも、いささかの類似性もない」という)変換可能な二つの見方の相反性をも説いたのである(ウィトゲンシュタイン『探求』[1997: II 46] 参照)。

品川はこう述べている。

私はそれ〔相反する二つの見方の変換〕が可能な場はひとつの理論ではなく、ひとりの人間の生、ないしは、複数の人間の対話という生活実践ではないかと考えている。後者であるのは、私や私たちの見方と異なる見方は他者や私たちには属さない者からこそ与えられるのかもしれないからであり、前者であるのは、他者との関係を通じて私自身が変容しうるのかもしれないからである。

(品川「〈ケアと正義の反転図形〉と〈ふくらみのある正義〉」[2014: 171])

したがって、私は二つの見方の習得をひとりの人間の徳の涵養というふうには説明しない。

(品川「〈ケアと正義の反転図形〉と〈ふくらみのある正義〉」[2014: 173])

「ひとつの理論」という言葉で想定されているのは、実は(品川の主張に疑義を呈する)川本

の議論なのだが、本来的にはローレンス・コールバークの道徳性発達理論も射程に入っているということになろう。いずれにせよ、これはつまりは「ひとつの理論」より、「ひとりの人間」という場の方が広いという話であろう。

この点に関して、もう少し話を続けたいのだが、と言うのも、コールバークが次のように述べているからである。

倫理学では、ムーアによる「自然主義的誤謬」の指摘、すなわち「である」という命題から「べきである」という命題を導出するという誤まりの指摘から、五十年間にわたる前述の〔「である」に関する洞察と「べきである」に関する洞察の〕分離が始まった。

(コールバーク〔「である」から「べきである」へ〕[1985：7])

「である」と「べきである」の混同は、逆の方向（「べきである」から「である」へ）でなされるのが極めて多い。すなわち、文化的に多様であるという事実から、理念上の道徳についての混乱が導かれるかわりに、寛容という相対主義的な考え（倫理的相対主義）が事実についての混乱（文化的相対主義）を導くのである。

(コールバーク〔「である」から「べきである」へ〕[1985：14-15])

しかし、ギリガンの「もうひとつの見方」もコールバーク自身の見方を補完するものに過ぎない、と主張するのは、コールバークの方こそが「理論はひとつであるべきである」という考えに囚われてしまっているからではないだろうか。そもそも、発達段階論自体、「べきである」という洞察から離れて、価値自由的に提示することなど不可能であるはずなのである。

翻って、結婚の比喩から多義図形の比喩への転換は、ギリガンの「もうひとつの見方」がコールバークの理論を補完するにとどまるものでないことの宣言であると見ることができよう。

5. 「能動／受動」の言語と「能動／中動」の言語

ここで今一度、ギリガンの議論を離れて、言語学における中動態の扱いに視線を転じたい。やはり中動態に注目している國分功一郎が「中動態を神秘化させてはならない」と説き、「そのために言語学における中動態研究を参照しなければならない」と述べているのだが（國分「中動態の世界」[2014a；2014b；2014c；2014d；2014e；2014f]）、そう言われてみると、ベンヤミンもガーダマーも木村も、中動態を特別扱いしている嫌いがあるように思える

からである。

中動態はかつて能動態と対立する位置を占めていたのであり、能動態もまた、中動態との対立から受動態との対立へと自らの位置を移動するに伴ってその意味を変更したのだった。だとすれば、中動態の定義において最も重要なのは、能動態との対立において、かつ、能動態そのものを再定義しつつ、これを定義することに他ならない。これまで中動態の定義がうまくいかなかったのは、この歴史的变化を踏まえていなかったからである。… [エミール・] バンヴェニストだけが、能動態との対立において、かつ能動態それ自体を再定義しつつ、中動態を定義している。

(國分「中動態の世界」[2014c : 101])

國分はこう述べて、バンヴェニストの主張を次のように要約している。

能動／受動の対立では、何かをするかされるかが問題であった。能動と中動の区別においては、主語が過程の外にあるか内にあるかが問題になる。

(國分「中動態の世界」[2014c : 102])

そして、こう付け加える。

ここで今一度、する／されるの対立としての能動／受動の区別が、強く「意志」を想起させるものであったことを思い起こそう。中動態でしか表せない動詞は、この区別に強く抵抗している。

(國分「中動態の世界」[2014c : 103])

能動／受動の対立は、する／されるの対立であり、意志を強く喚起するものであった。それに対し、能動／中動(外態／内態)の対立では、意志は全く問題にならない。そこで問題になるのは、主語が過程の外か内

かである。能動態と中動態を対立させる言語では、意志が前景化しない。
(國分「中動態の世界」[2014c : 105])

バンヴェニストのペアリングによる(「能動／受動の対立」と「能動／中動の対立」という)二組の「態」に、相異なる度合いの「意志」を見て取る國分の見方によるならば、なるほど前段の「今度結婚することになりました」とか「就職することになりました」という言い方においては、意志が前景化していない。「私、結婚します」という時の言語と「今度結婚することになりました」という時の言語とは、こんなにも違うのだ、とも言えそうである(前者の物言いが意味深なのは、まさしく意志が前景化しているからであろう)。

バンヴェニスト(『動詞の能動態と中動態』原著『*Problèmes de linguistique générale I*』1966年刊[1983:165-173])以外にも、細江逸記が印欧語と日本語における「能相」、「中相」、「所相」の変遷を概観し(「我が國語の動詞の相を論じ活用形式分岐の原理に及ぶ」[1928])、また、三上章が印欧語の「能動／受動」の対立を離れて、日本語における「能動／所動」の区別を論じてもいる(原著『現代語法序説』1953年刊[1972:98-112])。本稿では、これ以上踏み込まないが、細江や三上の議論からも「態」のペアリングに関する問題意識を見出だすことができよう。

翻って、ギリガンの「もうひとつの態」とは、「能動態と中動態を対立させる言語」のことと言えるのではないか。そう見るならば、木村とブランケンブルクの対立、あるいは結婚の比喩を用いるギリガンと多義図形の比喩を用いるギリガンの対立は、次のように見定めることができる。木村や結婚の比喩を用いるギリガンが「能動／中動」の中の対照を見ていたのに対して、ブランケンブルクや多義図形の比喩を用いるギリガンは「能動／受動」と「能動／中動」の対照を見ていたのだと。

「もうひとつの態」の解として、「中動態」でなく「能動／中動を対立させる言語」を提示するのは、カテゴリー・ミステイクを犯した、筋の悪い解答なのではないか、という批判は甘受しよう。木村とブランケンブルクの対立について言えば、「みずから」と「おのずから」という同一の語彙を使って、ともに同じ「能動／中動」の対照を論じているのだ、と見ることも可能であ

る（素直に読めばそのように解されるだろう）。しかし、この見立てによっては、両者の対立は解消しないし、その見通しの悪さから、「中動態の神秘化」を来たすばかりであろう。

両者の対立は、同じ「能動／中動」の対照についての見解の相違でなく、木村が「能動／中動」の対照を見ているのに対して、ブランケンブルクが「能動／受動」と「能動／中動」の対照を見ているがゆえの、いわば論理的な必然なのである（そう解するべきである）。「みずから」と「おのずから」という同一の語彙で、しかし相異なる論理階層を明確にしないままに、議論が続いているために、カテゴリー間のジャンプが見えづらい状況を招いてしまっているのである。

6. 遡行的に見出される意志と自然

國分は意志について、こう述べていた。

人は能動的であったから責任を負わされるというよりも、責任あるものと見なしてよいと判断されたときに、能動的であったと解釈される…。意志を有していたから責任を負わせれるのではなく、責任を負わせてよいと見なされた瞬間に、意志の観念が突如出現するのだ。

（國分「中動態の世界」[2014a : 86]）

このような事後性あるいは遡行性とでも呼ぶべき、意志の性質は、東浩紀によっても語られている。

東 …例えば僕がいまここに生きていること自体は無根拠です。ただ僕の無根拠はうちの娘にとっては必然です。なぜなら、うちの娘は、僕が妻と結婚して子どもをつくっていなければ存在しないからです。これ以上の必然性はない。この非対称性が大事だと思います。僕にとっては妻と結婚することはまったく必然ではないし、子どもをつくることも必然ではないし、東京に住んでいることも必然ではない。けれどもそれがうちの娘にとっては全部必然に変わる。偶然と必然はインターフェイスでしか出て来ないのです。自分にとっての必然的選択という話をしている限り、絶対に必然は現れない。

…結局、何かを誕生させるということは暴力ですよ。暴力と必然は密接に結びついていて、暴力の問題や根拠の問題は、誰かにとっての偶然が別の人のための必然であるという交叉（キアスム）において考えなければいけない。

…必然とはそういうレトロスペクティブなものではないと思う。言い換えれば、リアルタイムからずれたところにしか必然性はない。

すべての必然性はあとから発見されるものなのです。何かが起こるのを期待したり、何かを決定するときに必然性を探してはいけません。むしろ廻行的な必然性を受け入れること。責任を取るというのはそういうことだと思います。

（東「デッドレターとしての哲学」[2015：137-138]）

東の議論を國分の議論につなげるならば、親になる偶然性は「おのずからそう成った」あるいは「そう成ってしまった」というように「能動／中動」の言語で語られるのに対して、親である必然性は「みずからがそう為したんでしょ？」というように「能動／受動」の言語で語られるのであり、これらは立場によって変わるだけでなく、時間によっても変わるような、実に移ろいやすいものなのである。

アネット・ベイヤーがまさに「ギリガンのもうひとつの声とは潜在的な親の声であると言っても過言ではない」と述べている（『*Moral Prejudices*」[1994：30]）。そして、「非選択的な関係」を問題化させているのだが、こちらも東や國分の議論につなげるならば、親になる「選択性」と親である「非選択性」という具合に、およそ偶然と必然の「キアスム」を記述する用語として、これらを仕立て直すこともできよう。その場合、「選択性」の方が後から見出されるもの、という話になるのか。

このような廻行性あるいは事後性についても、木村は「ポスト・フェストゥム」という用語を用意している。逐語訳的には「祭りの後」という意味なのだが、まさに「事後的」と訳されている言葉なのである（木村はさらに「後の祭りの」という訳を与えている）。反対語として、「事前的」と訳される「アンテ・フェストゥム」という言葉も存在する（木村はこれに「前夜祭的」さらには「先走りの」という訳を与えている。両概念の初出については、木村の説明に譲る。『著

作集2』[2001a: 23, 191]、『著作集3』[2001b: 60]、『講義』[2012: 71-74]など参照)。そう言われてみると、「みずからがそう為したんでしょ？」というのが「事後的な」言葉であるのに対して、「私、結婚します」というのは実に「事前的な」言葉ではないか。両者好対照を成している、と同時に、両者ともども、意志が前景化した（責任の間われる）言語であると言えよう。

これらに対して、木村は「イントラ・フェストゥム」という造語も提示している。やはり逐語訳的には「祭りの最中」というところなのだが、「事前的／事後的」との対照を取るならば、「最中的」や「只中的」というほどに訳出されようか（先の対概念と異なり、こちらは木村のオリジナル。自ら「祝祭的」という訳を与えている。『著作集2』[2001a: 243]、『著作集4』[2001c: 111, 156]、『講義』[2012: 134]など参照）。翻って「今度、結婚することになりました」とか「そう成ってしまった」といった物言いは、その時制にかかわらず、まさしく「只中的」ではないだろうか。そして、これが、意志が前景化する以前の言語の特徴なのではないだろうか。

にもかかわらず、すべてが「能動／受動」の言語で書き上げられる世界にあっては、「何が我々のおのづからであつたかといふことは、やはり辛苦して是から捜し出すの外は無いやうである」（柳田國男「婚姻の話」[1999: 490]→竹内が自著に引用[2004: 139]）。ギリガンが描こうとした「もうひとつの態」とは、そのような人間の自然だったのではないだろうか。だとすれば、私たちは、「人生を自然の現象と観ずる練修」として、ギリガンの議論にアクセスし続けるべきなのではないか。

品川もまた「ケアの倫理にとって、傷つきやすさと生命の失われやすさは人間を成り立たせている自然的な基礎であるがゆえに人間の条件なのであって、克服されるべきものでもなければ克服されうるものでもない。むしろ、人間の自然的な基礎はまさに人間の条件であるがゆえに、ノモスと対立するピュシスではなくて、ノモスによって保護されるべきピュシスなのである」と述べて（「ノモスとピュシスの再考」[2013: 21-22]）、ギリガンの議論に端を発する「ケアの倫理」論が人間の自然を問題化するものである旨の主張を展開している。

文献表

東浩紀

- 2015 「デッドレターとしての哲学」(聞き手宮崎裕助)『現代思想 2015年2月臨時増刊号 総特集 デリダ 10年目の遺産相続』青土社

ウィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein)

- 1997 『「哲学的探求」読解』(黒崎宏訳解説) 産業図書

上野千鶴子

- 2002 『差異の政治学』岩波書店
2011 『ケアの社会学 当事者主権の福祉社会へ』太田出版

江原由美子

- 2000 『フェミニズムのパラドックス 定着による拡散』勁草書房

掛川典子

- 1993 「フェミニスト・エシクスの諸問題」『女性文化研究所紀要』11

川本隆史

- 1995 『現代倫理学の冒険』創文社

木村敏

- 2001a 『木村敏著作集 第2巻 時間と他者／アンテ・フェストウム論』弘文堂
2001b 『木村敏著作集 第3巻 躁鬱病と文化／ポスト・フェストウム論』弘文堂
2001c 『木村敏著作集 第4巻 直接性と生命／イントラ・フェストウム論』弘文堂
2008 『臨床哲学の知 臨床としての精神病理学のために』(聞き手今野哲夫) 洋泉社
2012 『臨床哲学講義』創元社
2014 『あいだと生命 臨床哲学論文集』創元社

木村敏／坂部恵

- 2006 『身体・気分・心 臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所
2009 『〈かたり〉と〈つくり〉臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所

木村敏／野家啓一

- 2011 『空間と時間の病理 臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所
2013 『「自己」と「他者」臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所
2015 『臨床哲学とは何か 臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所

ギリガン (Carol Gilligan)

- 1986 『もうひとつの声 男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』(岩男寿美子監訳) 川島書店
2014 「道徳の方向性と道徳的な発達」(小西真理子訳)『生存学』第7号

國分功一郎

- 2014a 「中動態の世界」『精神看護』2014年1月号
- 2014b 「中動態の世界」『精神看護』2014年3月号
- 2014c 「中動態の世界」『精神看護』2014年5月号
- 2014d 「中動態の世界」『精神看護』2014年7月号
- 2014e 「中動態の世界」『精神看護』2014年9月号
- 2014f 「中動態の世界」『精神看護』2014年11月号

コールバーグ (Lawrence Kohlberg)

- 1985 「「である」から「べきである」へ」(内藤俊史／千田茂博訳) 永野重史編『道徳性の発達と教育』新曜社

相良亨

- 1995 「「おのずから」形而上学」「「おのずから」の自然」『相良亨著作集6』ペリかん社

品川哲彦

- 2007 『正義と境を接するもの 責任という原理とケアの倫理』ナカニシヤ出版
- 2013 「ノモスとピュシスの再考 ケアの倫理による社会契約論批判」『法の理論32 特集《ケアと法》』成文堂
- 2014 「〈ケアと正義の反転図形〉と〈ふくらみのある正義〉」『法の理論33 特集《日本国憲法のゆくえ》』成文堂

竹内整一

- 2004 「「おのずから」と「みずから」日本思想の基層」春秋社

西村清和

- 1989 『遊びの現象学』勁草書房

バンヴェニスト (Émile Benveniste)

- 1983 「動詞の能動態と中動態」『一般言語学の諸問題』(岸本通夫監訳／河村正夫訳) みすず書房
- ベイヤー (Annette Baier)

- 1994 *Moral Prejudices: Essays on Ethics*, Harvard University Press.

細江逸記

- 1928 「我が國語の動詞の相 (Voice) を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理の一端に及ぶ」市河三喜編『岡倉先生記念論文集』岡倉先生記念還暦祝賀会

細見和之

- 2009 「ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む 言葉と語りえぬもの」岩波書店

丸山眞男

- 1996 「歴史意識の古層」『丸山眞男集 第10巻』岩波書店
- 2008 『丸山眞男話文集2』みすず書房

三上章

1972 『現代語法序説 シンタクスの試み』 くろしお出版

森村修

2000 『ケアの倫理学』 大修館書店

柳田國男

1999 「婚姻の話」『柳田國男全集17』 筑摩書房

山岸明子

1987 「付論 コールバーグ理論の新しい展開 主としてギリガンの批判をめぐって」
『道徳性の形成』 新曜社

1995 『道徳性の発達に関する実証的・理論的研究』 風間書房